

令和元年度冬季

全国大学国語国文学会 第一二〇回大会案内・要旨集

期日 一二月七日（土）・八日（日）
会場 岩手県立大学 滝沢キャンパス 講堂・共通講義棟

I G R いわて銀河鉄道・滝沢駅下車、岩手県交通バス5分、徒歩15分
J R 東北新幹線・盛岡駅下車、岩手県交通・岩手県北バス30分

令和元年度冬季

全国大学国語国文学会 第一二〇回大会のご案内

○同封の葉書に出欠をご記入の上、十一月二〇日（水）までに必ず到着するようにご返送ください。（ご欠席の場合も必ずご返送をお願いいたします）。

○一二月七日（土）の、昼食代（二、〇〇〇円／委員のみ）、懇親会費（一般・大学院生・五、〇〇〇円）、一二月八日のレジュメ資料代（一、〇〇〇円）、昼食代（二、〇〇〇円）は、同封の郵便振替用紙（口座名称／全国大学国語国文学会 第一二〇回大会、口座番号／〇二二九〇一七―一二七九〇八）にて十一月一九日（火）までにお振り込みください。

○会員の方々へ要旨集をできるだけ早くお届けするために、司会者のお名前は入れてありません。レジュメ資料集には司会者のお名前も入ります。事前に出張依頼状が必要な方、または大会についてのお問い合わせは、左記の事務局までご連絡ください。

早稲田大学 教育学部 石原千秋研究室
全国大学国語国文学会事務局 ・ 第一二〇回大会担当
zenkoku-daigaku.waseda2017@gmail.com

第一日 一二月七日（土）

代表委員会（11時00分～11時30分）

共通講義棟 一〇五教室

委員会（11時30分～12時00分）

共通講義棟 一〇五教室／控室 共通講義棟一〇一教室

受付 12時30分～

開会 13時00分～

会場 岩手県立大学講堂

開会の辞

学会代表挨拶

会場挨拶

総合司会／群馬県立女子大学教授 安保 博史

東京学芸大学名誉教授 河添 房江

岩手県立大学盛岡短期大学部教授・学部長 千葉 俊之

大会テーマ

「未知のものと出会うとき―文学におけるみちのくの発見―」

文学は、未知のものに出合った驚きを表現すること、言葉によって未知のものを表象する営みかもしれない。こうした未知のものをめぐる志向がもつとも鮮明に表れるのが、土地をめぐる問題である。だがそれを未知のものとし、だが未知のものとされるのか、なにが未知のものとされるのか。ここには、私たちの営みの根本的な問題がある。

東北はかつて陸奥（みちのく）と呼ばれて、「発見」されてきた。それが東北と呼ばれるようになったとき、新たな「発見」となり、何かが失われ、何かが付け加えられたのではないだろうか。あるいは、未知とされたものの側から、自らを未知のものと認識したものを、見ることできたらどうなるだろうか。このシンポジウムでは「みちのくから東北へ」という問題を設定することで、「未知のもの」という視座から文学という営みをとらえ返してみたい。

なお本学会では、東北のこうした特性を扱ったシンポジウムを今までにも行い、それを『文学・語学』にまとめた（第191号、第212号）。今回はその時の議論も振り返りつつ、議論を深めたい。

公開シンポジウム（13時15分～17時00分）

みちのくの言葉から東北方言へ―その文学との関わり―

みちのくが未知の世界に出会う―「文化露寇」の衝撃を考える

古歌によるみちのくの発見と再生―菅江真澄の詠歌を中心に―

明治大学教授	小野 正弘
慶應義塾大学教授	津田 眞弓
國學院大學名誉教授	豊島 秀範
司会／國學院大學教授	大石 泰夫

懇親会（17時30分～）

会場 岩手県立大学生協食堂

会費 一般・大学院生 五、〇〇〇円

※懇親会ご参加者は、終了後、バスにて盛岡駅西口にお送りします。

第二日目 一二月八日（日） 研究発表大会（10時00分～15時20分）

会場・共通講義棟一〇一教室

総合司会／弘前大学教授 郡 千寿子

（10時00分～11時20分）

『源氏物語』明石姫君の裳着―秋好中宮による腰結の意義―

國學院大學兼任講師 神原 勇介

『源氏物語』玉鬘巻「水鳥の陸にまどへる心地」の「水鳥」の深層―漢詩文表現の類例との異なりから―

横浜隼人高校（非） 浜田 賢一

〈休憩〉

（11時30分～12時10分）

「化物屋敷」の化物―仮名草子・浮世草子を中心に―

青山学院大学大学院 岡島 由佳

〈昼休憩・共通講義棟一〇五・一〇六講義室（12時10分～13時10分）〉

総合司会／同志社女子大学准教授 大津 直子

（13時10分～13時50分）

子規における其角の位置―蕪村評価への一視点―

日本学術振興会特別研究員PD 田部 知季

〈休憩〉

(14時00分～15時20分)

森鷗外「蛇」論——宗教を手がかりに——

大正大学大学院 岩谷 泰之

谷崎潤一郎「乱菊物語」論——複数の作中人物の内面を語る語り手

関西大学大学院 猪口 洋志

総会・授賞式(15時30分～16時30分) 会場・共通講義棟一〇一教室

総会

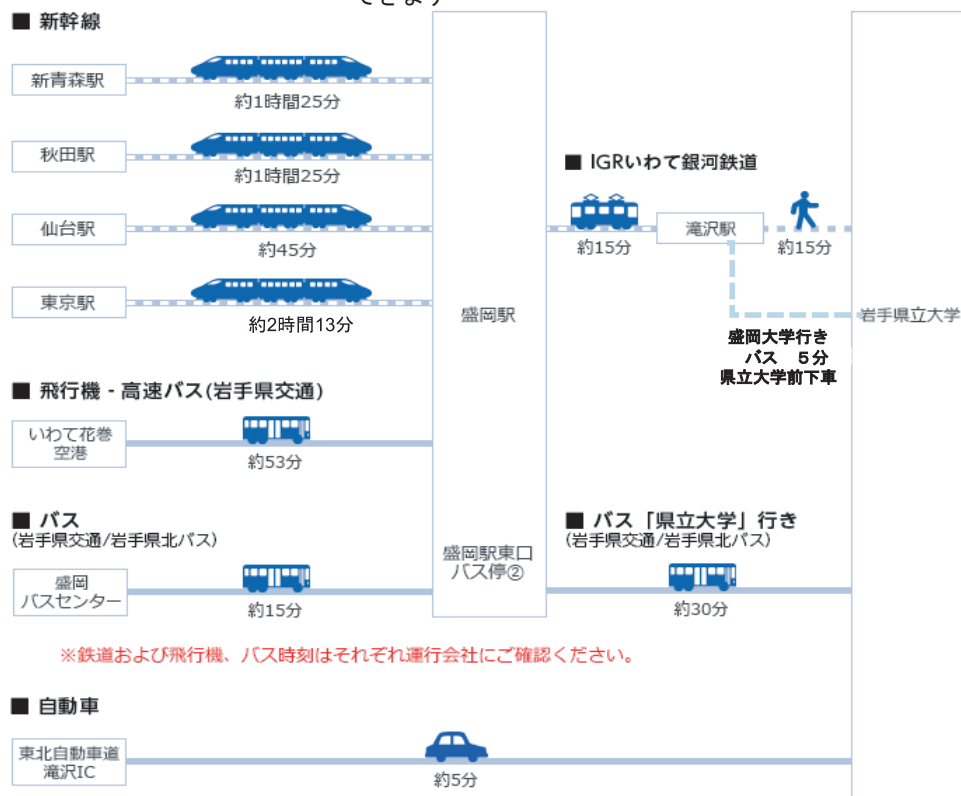
研究発表奨励賞

閉会の辞

岩手県立大学盛岡短期大学教授 松本 博明

岩手県立大学までのアクセス

IGR いわて 銀河鉄道+バスのご利用が、土日はよりスムーズに移動できます



盛岡駅発⇒滝沢駅着⇒バス滝沢駅発

8 : 1 3 ⇒ 8 : 2 8 ⇒ 8 : 3 2
 8 : 4 0 ⇒ 8 : 5 5 ⇒ 9 : 0 0
 9 : 3 1 ⇒ 9 : 4 6 ⇒ 9 : 5 0
 1 0 : 2 0 ⇒ 1 0 : 3 5 ⇒ 1 0 : 3 9
 1 1 : 0 9 ⇒ 1 1 : 2 4 ⇒ 1 1 : 2 7
 1 1 : 5 7 ⇒ 1 2 : 1 2 ⇒ 1 2 : 1 7
 1 2 : 3 9 ⇒ 1 2 : 5 4 ⇒ 1 3 : 2 5

施設配置図



お問合せ先・菓子車庫・滝沢営業所

箱清水=巢子箱清水線 系統番号229)

— 8 —

茶畑(中野一丁目)ー盛岡バスセンターー

盛岡駅前—上堂—巢子車庫—岩手県立大学

大通三丁目<251>

[illegible]

盛岡市内ホテル・旅館一覧

〔盛岡駅東口周辺（徒歩 5 分以内）〕

- ・ ホテルメトロポリタン盛岡 TEL 019-625-1211
- ・ 東横イン盛岡駅前 TEL 019-625-1045
- ・ 盛岡ニューシティホテル TEL 019-654-5161
- ・ R&B ホテル盛岡駅前 TEL 019-653-3838
- ・ 扇屋旅館 TEL 019-651-3964
- ・ 盛岡シティホテル TEL 019-651-3030
- ・ ルートイン盛岡駅前 TEL 019-604-3100
- ・ 東横イン盛岡駅南口開運橋 TEL 019-604-1045
- ・ ホテルメトロポリタン盛岡ニューウィング TEL 019-625-1211

〔盛岡駅東口から徒歩 10 分ほど〕

- ・ ホテルパールシティ盛岡 TEL 019-625-3311
- ・ ホテルエース盛岡 TEL 019-654-3811
- ・ スーパーホテル盛岡 TEL 019-621-9000

〔盛岡の繁華街・盛岡駅東口から徒歩 15 分ほど〕

- ・ アートホテル盛岡 TEL 019-625-2131
- ・ ホテルロイヤル盛岡 TEL 019-653-1331
- ・ ホテルニューカーリーナ TEL 019-625-2222
- ・ ダイワロイネットホテル盛岡 TEL 019-604-2155
- ・ 盛岡グランドホテルアネックス TEL 019-625-5111
- ・ ドーミーイン盛岡 TEL 019-622-5489

〔格安ホテル・旅館〕

- ・ ホテル盛岡ヒルズ（駅前） TEL 019-623-7008
- ・ 国分旅館（駅前） TEL 019-654-4364
- ・ ホテルカーリーナ（繁華街） TEL 019-624-1111
- ・ 盛岡リフホテル TEL 019-654-4151
- ・ ホテル山王 TEL 019-651-0591

令和元年度冬季 全国大学国語国文学会 第一二〇回大会 要旨集

総合司会／弘前大学教授 郡 千寿子

司会／静岡英和学院大学准教授 畑 恵里子

『源氏物語』明石姫君の裳着―秋好中宮による腰結の意義―
國學院大學兼任講師 神原 勇介

『源氏物語』玉鬘巻「水鳥の陸にまどへる心地」の「水鳥」の深層―漢詩文表現の類例との異なりから―
横浜隼人高校非常勤講師 浜田 賢一

司会／関西学院大学教授 森田 雅也

「化物屋敷」の化物―仮名草子・浮世草子を中心に―
青山学院大学大学院 岡島 由佳

総合司会／同志社女子大学准教授 大津 直子

子規における其角の位置―蕪村評価への一視点―
日本学術振興会特別研究員PD 田部 知季

司会／奈良教育大学教授 日高 佳紀

森鷗外「蛇」論―宗教を手がかりに―
大正大学大学院 岩谷 泰之

谷崎潤一郎「乱菊物語」論―複数の作中人物の内面を語る語り手―
関西大学大学院 猪口 洋志

全国大学国語国文学会 第二二〇回大会
研究発表会 発表要旨

【研究発表会・共通講義棟一〇一教室】

『源氏物語』明石姫君の裳着

—秋好中宮による腰結の意義—

國學院大學兼任講師 神原 勇介

『源氏物語』梅枝巻には、明石姫君（以下、姫君）の裳着の記事がある。裳着は男性の元服に当たる女子の成人儀礼で、裳の腰紐を結ぶ「腰結」は元服の「加冠」に匹敵する重要な役回りであった。明石姫君の場合、これを務めたのは秋好中宮（以下、秋好）である。腰結役は、父親自身、ないしは、親族中の高位の者が行うとされ、秋好は一見適任とも映る。しかし、当帝の中宮が一臣下の娘の裳着で腰結を務めることは、物語中にはもちろん、史実上にも例がない。その点は光源氏自身も述べており、作品中でも同様の認識だったことが窺われる。異例を嫌う平安貴族社会の風土を考えれば、これは将来の中宮を目指す姫君に無用な傷を負わせかねない冒険的な措置だったはずであるが、光源氏はなぜそんな人選を行ったのか。

述べたように、中宮の腰結の例は史実になく、准拠論の観点では、「歴史離れ」ということになる。ところが、中宮の腰結はないのに、逆に臣下の元服で天皇が加冠を務めた例はある。桓武

天皇が藤原緒嗣の、光孝天皇が藤原時平の元服のそれぞれ加冠となった事例であるが、こちらの方が中宮の腰結以上に破格の処遇と見える。歴史上に存在しなかった中宮腰結という設定は、この天皇加冠の史実を裏返したところに生じる作品固有の虚構であり、その手法ゆえに、現実にあろうる事柄であるがごとき説得性が胚胎されることになる。

姫君は、后となる将来を占われているが、無為にしてそれが実現されるわけでない。特に卑姓の実母を持つ姫君には、将来の中宮候補として大きな負い目があることになるが、それを覆い隠してきたのが養母の紫の上であった。光源氏が、秋好の腰結によって、姫君にさらなる箔付けを試みたのは、紫の上を養母に擁するだけでは持ちこたえられないと見たからではないか。すなわち、これは紫の上の限界の露呈でもあり、やがて惹起されてくる六条院の動揺を暗示する役をも担っている。

『源氏物語』玉鬘巻「水鳥の陸にまどへる心地」の「水鳥」の深層
—漢詩文表現の類例との異なりから—

横浜隼人高校非常勤講師 浜田 賢一

『源氏物語』玉鬘巻には、意見百出の諺「水鳥の陸にまどへる心地」がある。これは九州脱出を遂げた玉鬘一行が九条で滞留を余儀なくされた戸惑いの表現と目されている。これについて、先行説は『本朝文粹』の一節「水鳥之陸歩」を参照しつつ、「村上天皇の策問を引いたとみるよりは、むしろ当時の諺とみるべきものか」との結論に留めるのみだ。確かに、この一節は詩の良し悪しについてのものであって当該の文脈に馴染まず、直接の典拠で

はないといか言いようがない。しかし、同表現の希少性や類似表現のありように目を向けると新たな一面が見えてくる。

同表現は先の一節のみのようだ。一方、類似表現は『金光明最勝王経』の「如魚処陸」等があり、陸地に不慣れで戸惑う生物として、当該の「水鳥」ではなく、「魚」が目立つ。よって、玉鬘巻で用いられた「水鳥の陸に」とは、陸地に不慣れな代表格「魚」を用いた諺が回避され、ややもすれば上陸もする「水鳥」の表現が用いられた形となる。

都での貴族としての再起が叶わぬ玉鬘たちの「瀕死」状態をよりよく表現し得る陸上の「魚」ではなく、「水鳥」が用いられた理由としては物語に描かれる水鳥「雁」の意図的な比喩の連環が見逃せないだろう。それは玉鬘十帖の「雁」が内大臣家の血脈、なかでも居所を転々とする姫君らの比喩として用いられていくからだ。当該では玉鬘は内大臣家の娘とは知られぬ段階であり、一行の一員として臆気にしか認知しえぬ。その折、同じく「雁」とは断言しきれぬ、曖昧模糊とした「水鳥」に隠れた存在として描かれたのだ。

さて、玉鬘一行は『古謡集』の一節「早船鳥なれば」を思わせる「早舟」に乗り、九条に迷って「水鳥」と語られる。後に、一行は南下し、観音霊験の風を得て雁の如く北上し、宿願であった父内大臣との再会を果たす。こうした展開の中に先の表現があった点を、当時からすでに南方に観音霊場が意識されたことと合わせて論じる。

「化物屋敷」の化物

― 仮名草子・浮世草子を中心に ―

青山学院大学大学院 岡島 由佳

本発表では、化物と遭遇する「化物屋敷」の話型の特徴について検討する。「化物屋敷」の話型は、化物が出るという噂の屋敷に、人間がそれを確認すべく尋ねると、その正体は年を経た動物やそこにかつて住んだ者の霊であった、というものが多い。

「化物屋敷」については、民俗学の側から民間伝承の資料や都市部の例を中心に宮田登氏や、橋爪紳也氏等の先行研究がある。先行論文では仮名草子・浮世草子の「化物屋敷」についてはあまり注目されておらず、全体を通して精査することで「化物屋敷」の話型の分類をし、分析することができると考える。

そこで、仮名草子・浮世草子の「化物屋敷」に出現する化物にはどのようなものがいたのかを具体的に示すため、『仮名草子集成』所収全作品、近世初・中期の怪談作品を対象とし、調査した。その結果を通覧し、分類すると四つの類型に整理できるといえる。一つは化物の正体が幽霊の場合、次に動植物・器物の場合、そして正体不明の場合、最後に地神の場合である。化物の正体の違いは、「化物屋敷」の訪問者である人間との関係や、話の構図、結末と関わっている。化物と人間の勝劣という観点からみれば、幽霊や動植物・器物においては人間がより優勢であり、正体不明の化物においては人間との力は拮抗関係にあるといえよう。圧倒的な力を持つ地神は、人間には敵うべくもなく善にも悪にもなるものであった。

これらの化物が「化物屋敷」という空間のなかで、人間に様々な働きかける特徴的な行動には早くは『曾呂里物語』『諸国百物

語』『新御伽婢子』などに型が認められる。それらが後続の仮名草子・浮世草子作品に見られる「化物屋敷」の話に組み込まれ、「化物屋敷」の話型として形作られていき、近世初期から中期にかけて定型化していくことを具体例を挙げて考察する。

子規における其角の位置

— 蕪村評価への一視点 —

日本学術振興会特別研究員PD 田部 知季

正岡子規の俳句革新において、其角はいかなる位置を占めるか。子規は芭蕉に代表される元禄調と、蕪村に代表される天明調を対置し、両者の延長線上に明治期の新派俳句を位置づけた。そのため、従来の子規研究でも芭蕉と蕪村からの影響が度々論じられてきた。だが子規自身の発言によると、「芭蕉の心髄」たる七部集だけでは「元禄を尽さず」、「少くとも其角の著書の一二なりとも読むべ」きだという（「或問」、明治三二）。本発表では、芭蕉即元禄調という図式に還元できない其角への評価が、後年の蕪村評価にも影響していることを指摘する。

まず、子規による虚栗調の評価を確認する。子規は俳句分類の過程で近世期の俳書を通史的に辿り、明治二四年末頃には「七部集（殊に猿蓑）に眼を開」いて「始めて元禄の貴ぶべきを知」ったという（「俳句の初歩」、明治三二）。だが、子規はそれ以前に其角編『虚栗』（天和三）に出会っていた。彼は同書を「著るしく俳諧の一時代を限りしものにて其魂は既に正風の本体を得たり」と高く評価しており（「頼祭書屋俳話」、明治二五）、その傍ら、漢語に依存した句調を「佶屈」と難じている。

次に、俳句革新始発期の子規句における其角の影響について考察する。子規は虚栗調の「佶屈」さに批判的であり、実作面で其角句から顕著な影響を受けていたわけではない。ただし、当時実践していた「句兄弟」からは其角に対する関心の一端が窺える。最後に、一連の其角評価を踏まえた上で、明治二九年頃の「蕪村調」に対する子規の立場を再検討したい。子規によれば「漢語は延宝天和の間其角一派が濫用して終に其調和を得ず」、「蕪村に至りて始て成功を得た」という（「俳人蕪村」、明治三〇）。子規はそうした蕪村句の漢語を支持しつつ、漢語を乱用する同時代俳人に対して否定的な態度を示している。本発表ではそうした評価の背後に虚栗調への批判意識があることを指摘したい。

森鷗外「蛇」論

— 宗教を手がかりに —

大正大学大学院 岩谷 泰之

森鷗外は明治四四年（一九一一）一月『中央公論』第二十六年第一号に「蛇」を発表した。内容は以下の通りである。理学博士である主人公が信州の穂積家で一泊する。すると女の独り言が聞こえてくる。穂積家では当主・千足の母が亡くなったばかりで、その日は二七日の前日であった。奉公人の話によれば、偶然初七日の晩から仏壇に蛇が居座るようになり、千足の妻はそれからおかしくなったという。生前から妻と母との間には確執があり、千足はそれを悩んでいた。話を聞き終えた主人公は、ただ習性で仏壇にいるだけだとその蛇を捕まえ、妻を精神科に診せるようにと、科学的に穂積家の問題を解決する。

このような作品に対し先行研究では、作中で千足の妻が無政府主義者や社会主義者に例えられていることから、発表当時の大逆事件に結び付けられ、家族国家観を踏まえ、国家の問題が家の問題として表現されているのだと指摘されてきた。

こうした先行研究をもとに、本発表では宗教を手がかりに作品を分析する。「蛇」では穂積家の先代が仏教の信者であり、キリスト教信者になつてはならないと語られている。その他にも、最近の女性性は「神様」「仏」「天帝」を理由に説得することは出来ないといったことや、キリストの山上の説教は利害にうつつたえかけている等、宗教に関する表現が行われている。

また、家族国家観を論じた穂積八束は明治三〇年（一八九七）刊行の『国民教育 愛国心』で、日本の国教は祖先を崇拜する「祖先教」であると述べた。明治政府の成立により、神仏分離が行われ、日本人の宗教観は変化を余儀なくされた。それは葬式のあり方や、死者への意識にも変化をおよぼした。こうした当時の宗教にまつわる問題が、作品にどのような影響をおよぼしているのかということ考察したい。

谷崎潤一郎「乱菊物語」論

― 複数の作中人物の内面を語る語り手 ―

関西大学大学院 猪口 洋志

本作は谷崎の作品中で唯一、角書きに「大衆小説」と附された作品である。〈自由なる空想の余地〉を求めて、〈戦乱の世〉の〈時代に眼をつけた〉谷崎であるが、連載中に離婚をし、〈周囲の空気のために心おちつかず、とても筆が執れ〉なくなり、連載

を中断してしまう。しかし、連載中断の原因は離婚だけではなく、谷崎が描こうとした大衆小説が、他の大衆小説と異なるところがあり、読者に受け入れられなくなったことも原因の一つとして挙げられている。それは谷崎の終生のテーマである女性讃美を本作に持ち込もうとしたことである。

本作の語り手は、〈読者〉に対して、〈此の物語〉を記述することによって、話を展開させていく。語り手は、語りの現在に位置しながら過去の永正年中を語る場合と、過去であるはずの永正年中をあたかも現在として語る場合とがある。語り手は、現在と過去を往復しつつ、〈此の物語〉を語っているのである。

本作は宝物をめぐる攻防を描く系統と側室を求める武士の主従間の争いを描く系統の二系統から構成されている。このうち、語り手が内面を語る人物は、播州の城主とその周辺にいる人物であり、側室を求める主従の争いを描く系統に関わる人物である。反対に語り手が内面を語ることはない作中人物は、室の津の遊女かげろふを中心とした宝物をめぐる攻防に関わる人物である。

〈読者〉は、語り手によって、内面を語られている人物に寄り添うような視点を与えられる。内面を語られる主な作中人物は四者おり、四者四様の内面が描かれている。谷崎がテーマにしている女性讃美については、赤松上総介政村の内面を描くことによって達成されているものの、他の作中人物の内面をも描いたことから、女性讃美というテーマが希薄になっている。「大衆小説」に女性讃美の要素を持ち込んだ谷崎ではあるが、肝心の女性讃美を描き切ることができなくなつたのである。

本発表にて、以上を論証することとする。